

譜例③:ショパン:4つのマズルカOp.30より第4曲



ここからは、レクチャーコンサートの内容をお伝えします。

- プログラム
- ハイドン:ピアノソナタHob.XVI / 20,L.33
 - ベートーヴェン:《6つのバガテル》Op.126
 - ～休憩～
 - チャイコフスキー:ドゥムカ Op.59
 - グリーク:《抒情小曲集》より
 - 〈春に寄す〉op.43-6、〈小人の行進〉op.54-3、
 - 〈トルドハウゲンの婚礼の日〉op.65-6
 - ショパン:華麗なるワルツ第1番 op.18
 - ショパン:ノクターン第8番 op.27-2
 - ショパン:スケルツォ第2番 op.31



前半は、ハイドンの初期のピアノソナタとベートーヴェンのかなり後期の作品《6つのバガテル》Op.126を演奏されました。ベートーヴェンはピアノの進化とともに曲を作る際にも実験的なことを行っており、今回、ベートーヴェンが書いた通りのペダルの指示記号で演奏してみたいと、冒頭に語られました。氏のとても温かくやわらかな物腰で、演奏にもそのお人柄が表れているようでした。

前半の演奏終了後、弊社社長の加藤よりウルヴァロフ氏への質問がありました。

加藤: 非常にスケールが大きく感動しました。聴いていて、色々な音楽的な層があるなと感じたのですが、何か演奏に秘密があるのですか？

ウルヴァロフ氏: まずベートーヴェンが作曲した時にどういうイメージを持って作曲したか、何を考えて作ったかということを考えます。また、この赤坂サロンに設置されているベヒシュタインのモダンピアノも助けてくれました。この楽器では色々なことが可能です。様々な抑揚やダイナミクスをつけることができます。そして、左ペダルと右ペダルの使い分けによって音域感を出すこともできます。もしベートーヴェンがこの楽器を持っていたら、非常に感動し、他の楽器を押しつけてこれを弾いたのではないのでしょうか。

加藤: ベートーヴェン:《6つのバガテル》Op.126では、ペダルについて、今日は当時ベートーヴェンの書いた通りに演奏してみると仰いましたが、なぜそのような選択をしたのですか？

ウルヴァロフ氏: 当時と今のピアノでは違うけれども、リハーサルで試してみて、これならいつも色々な実験ができると感じました。

また、後半の演奏を終えて、ベヒシュタインの感想について聞かれると、ウルヴァロフ氏は、「ベヒシュタインは、音域のバランスが非常に取れています。スタインウェイは、力強く、豊かな低音、きらびやかな高音域が出ますが、一方で中音域は非常に工夫しないと目指す音が出てこないのです。中音域に関しては難しいです。ベヒシュタインの場合は非常にバランスが取れており、タッチも弾きやすいです。また、音色の選択も可能です」と語られました。ご自身もベヒシュタインピアノを所有されているということでベヒシュタインを熟知しておられ、プログラムも演奏もサロンの小さな空間と楽器の特性が生かされた内容で、大変勉強になりました。(前田)



株式会社ベヒシュタイン・ジャパン
〒157-0061 東京都世田谷区北鳥山9-2-1
TEL:03-3305-1211 FAX:03-3305-9931
E-mail: info@bechstein.co.jp
HP: https://www.bechstein.co.jp/

発行人 加藤正人
編集人 山田啓子 前田裕佳



ベヒシュタイン・クラヴィアシュール

Nr.1 2020.4

ベヒシュタインから見える風景

～ベヒシュタイン・ジャパン主催のコンサートの模様やレッスンレポートをお届けします～



“C. Bechstein Klavierschule” ベヒシュタイン・クラヴィアシュール

「ベヒシュタイン・クラヴィアシュール」とは、ベヒシュタインというピアノの個性・設計のコンセプトを活かし、楽曲をより深く理解し演奏する喜びを深める、ピアノの演奏法・上達法を括る概念の総称です。

Schule(ドイツ語)=school という言葉は一般的に学校という意味ですが、流派とか楽派という意味でも使用されています。流派とは、芸術などで、方法・様式・主義などの違いから区別されるそれぞれの系統を言います。(大辞泉)

音楽表現、そしてピアノ製造にもそれぞれ流派というものがああります。

ベヒシュタイン・ピアノの個性を尊重し演奏表現するピアニストに共通する部分は何か、を意識しながらそのパフォーマンスに触れてみると、それぞれに役割を持つ音の縦の分離と個々の横の流れを意識した立体感ある響きの創造、音域による響きの明暗のコントラスト、ハーモニーの進行による緊張感の変化から生まれる音造りに、これら芸術家の意識が向いていることがわかるようになります。

ベヒシュタイン・クラヴィアシュールは、ベヒシュタインの個性が音楽表現の可能性を引き出すことを提唱するものとして、多くの優れた演奏家やレスナーの方々のお力をお借りしながら展開している音楽教育活動です。

この活動を通じて皆様の音楽への情熱がより強く、深くなっていくことを願っています。

株式会社ベヒシュタイン・ジャパン 代表取締役社長 加藤正人

01

ベヒシュタイン・ジャパン ドビュッシー没後100年フィナーレ企画

『ドビュッシー ピアノ曲の秘密』

～ピアノ1台でオーケストラのような効果を出すには～



出演者: 青柳いづみこ(Pf)、加藤正人(対談)

日時: 2019年2月8日(金)

会場: 汐留ベヒシュタイン・サロン



今回は、ドビュッシー没後100周年のフィナーレ企画として、ピアニストで文筆家の青柳いづみこさんをお迎えしてのレクチャーコンサートでした。プログラムはオール・ドビュッシー。

前半は冒頭に〈夢〉を演奏された後、ピアノ制作マイスターで弊社社長の加藤とベヒシュタインやドビュッシーにまつわる対談が行われました。青柳さんが2018年に発売されたドビュッシーのCDでは、1925年製のベヒシュタインE型が使用されており、その録音に至る経緯を語って下さいました。CDの目玉である《聖セバスチアンの殉教》は、原曲がオーケストラの曲なので、その立体感や神秘的で摩訶不思議な雰囲気を出すのにこのE型がぴったりだったということです。これらについての詳しい内容は、『ドビュッシー ピアノ曲の秘密』(青柳いづみこ監修、音楽之友社2018年11月発売)の対談ページに掲載されています。

ここで、ベヒシュタインと他社のピアノの構造の違いについて、ピアノ製作マイスターの加藤より映像を使つての説明がありました。時代が変わっても現在まで継承されているベヒシュタインの特徴として、低音域、中音域、高音域と各レジスターの音色の違いを弾き分けることができるということ。戦前のはよりそれが強く反映されているが、現在のモデルにもその特徴は踏襲されているということです。ベヒシュタインのカタログなどで「オーケストラのような立体的で多彩な音色作りができる」という謳い文句を目にしますが、その言葉の意味がよく分かりました。さらに際立った特徴として、高音域にいくほど高い倍音が共鳴するようにズレ幅が大きく設計されており、高音でゆらぎが出るように工夫されている、という説明がありました。つまり、それによって生じるうなりが一音一音独特の味わいを生んでいる、ということです。青柳さんがベヒシュタインで特に気に入っているところは、ドビュッシーを弾く際、「ペダルを踏んだままでも音が濁らずクリアに聞こえるところ」だそうです!

後半は、青柳さんの演奏と解説でドビュッシーのいくつかの作品をもとに、各場面でのどのような音が求められているのか、また理想的な音を出す為にはどのように弾いたら良いか、またどのようにアプローチしたら良いか、という実践的なレクチャーが展開されました。主に取り上げられた曲は下記の通りです。

- ♪ 〈スケッチブックから〉
 - ♪ 《ベルガマスク組曲》より〈月の光〉
 - ♪ 《映像第2集》より 第1曲〈葉ずえを渡る鐘の音〉
 - ♪ 《聖セバスチアンの殉教》ピアノソロ版(カプレ編曲)より〈百合の園〉、〈法悦の踊り〉
 - ♪ 《前奏曲集第1巻》より〈亜麻色の髪の乙女〉、〈沈める寺〉、〈ミントレル〉
- ほか